アリスの穴の中で

上野 瞭

新潮社

アリスの穴の中で

上野 瞭

新潮社

アリスの穴(あな)の中(なか)で
著者／上野　瞭(うえのりょう)
●
発行／1989年8月15日
5刷／1989年12月10日
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411
●
印刷所／二光印刷株式会社
製本所／加藤製本株式会社
●
＊価格はカバーに表示してあります
© Ryo Ueno 1989, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-366002-3　C0093

アリスの穴の中で　目次

第一章　影のある夏　七
第二章　老人病棟　二四
第三章　第二内科のドン・ファン　四〇
第四章　尋問　五七
第五章　受胎告知　七三
第六章　悠介の場合　九一
第七章　呼ぶ声　一〇六
第八章　カボチャの馬車　一二四
第九章　ウサギの穴　一四一
第十章　訪問者　一五八
第十一章　岬の家　一七一

第十二章　胎動　一八七
第十三章　告白　二〇四
第十四章　アカハラの池　二二一
第十五章　「オー・マイ・パパ」　二二九
第十六章　放火事件　二五五
第十七章　扉の向こう側　二七九
第十八章　陣痛　二九二
第十九章　闇のまなざし　三〇二
第二十章　ふたたび夏の朝　三一四
あとがき　三二二

装幀　北見　隆

アリスの穴の中で

第一章　影のある夏

社内放送が流れた時、長沼壮介は三階のトイレにいた。
音をしぼったスピーカーの声が、
「企画第二室課長、至急、玄関受付までおいでください」
二度繰りかえしたのに、壮介は、四角い仕切りの中の洋式便器の蓋に腰をおろしたままだった。
朝からひどく調子が悪く、出勤途上の地下鉄の中で吐きそうになり、三つ目の駅で途中下車したほどだった。
手を離してもカバンが落ちないくらい満員の車輛から、じぶんの体をもぎ取るようにしてホームに這いでた壮介は、額に汗を浮かべたままエスカレーターに取りついた。
地上にでると、いきなり強い陽ざしが壮介の顔に降りかかってきた。
急激に気温が上昇することを告げる梅雨明け直後の夏空が、右手の建物の向こうに白く燃えひろがり、風はまったくなかった。
左手に「中央御苑」の石垣が続き、石垣の背後の密生した木立で蟬の声がした。
壮介はハンケチで汗を拭き取ると、反射的に時計を見た。始業時間の九時まで二十分しかなかった。
遅刻したくなかった。胃が重く、かすかな頭痛がこめかみのあたりに貼りついていたが、ひと息い

れると大急ぎで階段を駆けおりた。
電車が滑りこんできた時、もう一度吐き気に襲われた。
壮介は、電車が止るのを待たず、化粧室を示す男女マークの方向へ歩きだした。
中間駅の通勤ラッシュはすでに終っていて、ホームには数えるほどの人影しかなかった。その乗客を詰めこんだ連結車輛が、すぐに壮介の横を走り抜けていった。
壮介は、肩で大きく息をついた。
暗い洞穴の奥へ電車が消えると、胸のむかつきが薄らいだような気がした。
遅刻だなと思った。
壮介は、男マークの横の階段をゆっくりあがった。そこで、一人の男に出会ったのだった。

「長沼課長、いらっしゃいましたら、至急、玄関受付までおいでくださいませ」
化粧ボードを張りつめて目立たないようにした天井の社内スピーカーから、もう一度呼びだしが繰りかえされた。
壮介は顔をしかめた。
一度聞けばわかることである。
これでは壮介が、無責任に席を空けていることを、社内中に告げていることになる。
部長の立花が、眼鏡の奥の険しい目を書類から引きはなし、天井のほうに向けている姿を想像した。
その舌打ちの音が聞こえるような気がした。
便器の蓋から腰をあげようとして、壮介は胸をおさえた。
収まっていた吐き気が、ゆっくりよみがえってくる。
どうして……と考える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昨夜、食卓に並んだものは、海老フライと生野菜だった。
「あたしが揚げたのだから残さないでね」
短大に通っている娘の香織がいった。
絹ごし豆腐と茄子のおひたしがあって、それは妻の伶子の用意したものだった。
「とうさん食べないのなら、ぼくもらうよ」
壮介が、ビールの合間に冷や奴ばかり口に運ぶのを見て、中学二年の悠介がいった。
「なにいってるの。あんたの分、ほかより余計につけてあるのよ。海老フライはね、とうさんの好物。あとで御飯の時、ゆっくり食べるんだから」
香織は箸をとめて悠介をにらんだあと、壮介のほうを同意を求める目で見た。
壮介は結局、海老フライを二つとも食べてしまった。別に好物ではなかった。
いつか伶子にかわって夕食の仕度を始めた香織が、
「とうさん、海老フライ好き?」
と声をかけてきたので、深く考えず、うんと答えたところ、香織はそれから、海老フライを壮介の好物と思いこんでしまった。ただそれだけのことだった。
仕事の都合で、一週間のうち二度くらいしか家族四人揃って夕食をとることができないから、壮介は、香織の思いこみを訂正する気にはならなかった。
食事のあと、揚げものの油が胸に残って、気分が悪くなるということもなかった。そして今朝、目醒めた時も異常はなく、煙草の吸いすぎによるざらつきが、いつものように壮介の咽喉に貼りついているだけだった。
それが突然、満員電車の中で……。

「見せろよ」
その声を聞いた時、最初、壮介は空耳だと思った。つぎに、地下ホームのどこかに設置されている構内放送機から、駅員の私語が誤って洩れたのだろうと思った。
男子用トイレは、壁沿いに黄色く汚れた用便器が並び、反対側の大便所も、ドアがみな内側に開いた状態で、人の気配はまったくなかったからだ。
壮介は、割れた鏡の下に取りつけられた手洗い容器に両手をつき、先ほどまで繰りかえし起こった吐き気が、もう一度こみあげてくるのを待った。
だれもいないと思うから、声をだして吐く真似もしてみた。
かすかに胸のむかつきは残っているものの、もう、嘔吐感はもどってこなかった。
壮介は、変色した手洗いの中につばを吐くと、ついでのように小便器の前に立った。
くぐもった声を聞いたのはその時だった。
壮介は、じぶんにかけられた声だとは思わないから、ゆっくり用を足したあとズボンのファスナーを引きあげ、それから腕時計を見た。
始業時間になろうとしていた。
職場である『ライオン・ハウス』企画第二室の情景が、壮介には見える。
壮介の姿のない窓際の席をふりかえって、係長の瀬尾が眉をしかめている。
「課長がこの時間にきていないなんて、こりゃ雨になるぜ」
独身で、ネクタイやカラー・シャツに凝る牧が、お茶を配りだした若い女子社員にいっている。
企画第一室課長で、腰の軽い話好きの磯辺が、じぶんの部屋にはいる前、壮介の部屋をのぞき、調子のいい冗談を飛ばしているところかもしれない。
「沼さんよォ。あまり張り切らないでもらいたいね。だんなのところが動きすぎると、おれのほうま

で余分の仕事がまわってくるんだからな。どう、沼さん、今夜は？　仕事？　あのね、働きすぎは体に毒だよ。そう、きばるばかに塗ける薬なし。残業は墓場への近道。会社人間に老後なし」

磯辺の口癖である。

磯辺はそういいながら、壮介よりも遅くまで仕事で残っている。

企画第一室の仕事は、新製品の開発と宣伝。壮介の第二室は、顧客対象の催しの計画と実行、それに調査が中心である。

『ライオン・ハウス』は、妊娠・出産・育児に焦点を当てて幅ひろい関係用品の製造卸しを業務としている。

「地球がある限り、人いうもんは生まれては死んでいくもんや。間違うて、世の中の仕組みがけったいなもんに変わっても、お産と葬式はついてまわるやろ。当社は、他所さまの不幸で商売するつもりはないけど、子どもができた、可愛い……いうて喜んでる人で儲けさしてもらう。死んだもんに金使う人はないけど、生まれてきたもんには惜しみなく金使うのが人情や。そやから、ライオンみたいにたてがみ立てて、堂どうと品物を売りまくるこっちゃ」

初代の社長は、毎朝そういって社員の尻を叩いたという。

使い捨ての紙おむつとベビー・フードの開発で、『ライオン・ハウス』は急成長した会社である。

壮介も入社した頃、人形と紙おむつを持って百貨店や町の薬局をまわったものである。まだ乳幼児専門店など、どこにもなかった時代で、百貨店の仕入れ係や薬局の親父の前で、人形の股をひろげ、紙おむつの使用法を実演してみせた壮介である。

最初の子どもである香織が生まれた時、壮介は、おむつの取り替えだけではなく、試作品のベビー・バスで湯を使わせたり、ベビー・フードをスプーンで食べさせたりもした。

もちろん、出産前の伶子にも『ライオン・ハウス』製のマタニティ・ドレスを着せ、伶子の意見や

伶子の知人の反応も聞いた。
「要するにあたしも香織も動く看板なのね。サンドイッチマンじゃないの。それなのに、日給もアルバイト料もでないなんて、けちな会社ね」
伶子が、軽蔑するように壮介にいったことがある。
「ね。一度くらい、あなたも、これ着てみたらどうなの。そんなに会社の製品が気になるんだったら、社長も部長も、男子社員全員、妊婦服を着て出勤すればいいんだ。あたし一人が着てるより、ずっと宣伝効果があるわよ」
町なかで、洒落れたベビー用品専門店が目につくようになったのは、壮介が営業を離れた頃からである。
企画第二室の課長に抜擢された時、『ライオン・ハウス』もまた各地にチェーン店を作り、商品の動きをコンピューターでチェックするまでになっていた。
壮介の仕事は、「妊婦のための美容教室」、「無痛分娩講習会」、「育児セミナー」、あるいは「母と子のための心理学講座」といった催しものの設営である。
会場の確保、講師の選定と交渉、参加者への呼びかけ、運営準備や事後調査と、壮介は、企画第二室の社員八名をフルに使って動きまわらなければならない。一日のうちに場所を変えて、三つのセミナーを開催する時もある。そのため、九時の始業と同時に細かな打合わせをすることに決めている。
壮介は遅刻をしたことがなかった。会社には人よりも早く着くようにしていた。
それが、途中下車をして駅のトイレにいるのである。
「参ったな」
壮介は、壁の落書きに向かって思わず独り言を洩らした。そのまま、水道コックのほうに歩きだそうとした。そして、いきなり殴り飛ばされたほどの衝撃を感じたのだ。

無人であったはずの大便所の入口に一人、ひげだらけの男が立って壮介を見ていたからである。
壮介は息をのんだ。立ちすくんでしまった。
素手で胃袋をつかまれたように、ふいに吐き気がもどってくるのを感じた。
男は、真夏だというのにてかてかに光った厚手の冬ジャンパーを羽織り、脂と埃で汚れきったズボンをはき、そのファスナーをおろしたまま、隙間からじぶんのペニスを壮介のほうへ突きだしていた。
「おまえのを見せてくれ」
くぐもった声がもう一度した。
男が黒ずんだ唇の間から、わずかでも汚れた歯をのぞかさなければ、その言葉が男の口からでたものとは到底思えなかった。
壮介は呆然と突っ立っていた。咽喉が乾いて空気が薄くなったように感じた。
男は、くぼんだ細い目に思いつめたような険しい光をみなぎらせ、壮介を見つめたまま、両手でじぶんの股間の海綿体を力いっぱい握りしめた。
「み、見せろ。早く」
うめくようにいうと、ウサギの首でも締めあげるように性器を捩じあげた。
壮介は、じぶんの顔がひきつれるのがわかった。胸の奥から急激に嘔吐感がこみあげてくると、それが咽喉にからみ、今にもあふれそうになった。
男がふいに歯を食いしばった。体をうしろにのけぞらすようにした。獣のうめきがトイレ全体に響き渡り、つぎには大便所の仕切り板に、男は倒れるように背中を叩きつけた。
大きな音がしたはずなのに、壮介はそれを覚えていない。
つぎに壮介の聞いた音は、滑りこんでくる地下鉄のそれだった。

記憶がすっぽり抜け落ちているのではない。

男が激情の頂点に達した時、それに合わせるように壮介が吐いたことも、そのまま、よろめくように男子用トイレを飛びだしたことも覚えていた。

ただ、そこには音がなく、まるで古い無声映画か効果音を消した高速度撮影のフィルムのように、別の壮介がいた気がするのである。

壮介がもつれる足取りで飛びこんだ電車は、もう通勤ラッシュが終っていた。空席こそなかったが、人の手に握りしめられていない吊革が揺れていた。

壮介は、蒼白なふつうでない顔をしていたのだろう。吊革の一つに寄りかかると、まわりの乗客から探るような視線が走るのを感じた。

しかし、壮介は、それに反発する気にもならなかった。

男の姿と言葉が、粘液のように額のあたりに貼りついている感じで、それをふり払うためにも、早く車内の空気に溶けこみたいと思った。

壮介は、何事もなかったように網棚のうしろの車内広告を見た。

「しあわせ？　もちろん！　最高!!」というキャッチ・フレーズの下に、水着姿の若いカップルが手を取りあって笑っていた。二人の背景には信じられないような青い海があって、文字通り、陽の光が燦さんと降りそそいでいた。

どこにも、てかてかに光った冬ジャンパー姿の男の出場所はなかった。

それが作りものの世界であるにせよ、それを受け入れ、その作りものの具合を楽しむのが壮介たちの世界なのだと思った。

もちろん、ペニスを露出したあの男のいるところが世界であるはずはない。あれは、この世界のかすかな裂け目のようなものであって、たまたま壮介が、その窪みに足を取られただけである。たぶん、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com